

## 戦時中における国民読書運動と教養

佐藤 真美

国民読書運動は、太平洋戦争（1941—1945）の最中に展開された読書指導運動である。これは、図書群を用いた読書と読書会による読書指導を中核としていた。

戦時中の読書指導運動についての先行研究を見ると、図書群読書の提唱者で、運動の第一線で活躍した中田邦造（1897—1956）について研究されたものは多いが、同じく国民読書運動において重要な役割を果たした堀内庸村（1900—1962）については、名前があがる程度でほとんど研究がなされてこなかった。

そこで本研究では、まず、1930年代前半に石川県で実施された読書指導が国民読書運動として成立、展開されていくまでの過程を概観した。そして、堀内の経歴と理念、勤労青少年の読書の実態などを見ていくことで、国民読書運動がめざしたものが何で、この運動が国策協力という風潮の中でどのように実施されていったのかを明らかにすることを目的として、堀内の著書『国民読書と図書群』（1943）や『図書館雑誌』の記事の分析を行った。

堀内庸村は、日本図書館協会の図書群選定委員を務め（1941）、満州開拓読書協会（1943）や芝富読書指導者養成所（1944）の設立に尽力した。また、読書指導の指導書としての役割を念頭に置いて、著書『国民読書と図書群』を出版した。『国民読書と図書群』では、国民読書の理念と実施方法をまとめ、それについて解説が施されており、国民読書についてまとめられた図書の最初のものであった。

堀内は『国民読書と図書群』の中で、思想善導や国家の増産といった戦時中における当面の目的よりも、自己教育力を育み、教養を高めるといった恒久的な目的が先立つという認識を示しており、とくに勤労青少年の教養を高めることが大切であると考えていた。ここでいう教養とは、読書による人間性の開花、すなわち人間形成を目的とするものであったといえる。そしてこの理念は、日本図書館協会によって編成された甲種図書群目録にも反映されていることが、分析によって明らかになった。

本研究では、堀内庸村の著書である『国民読書と図書群』を分析することによって、従来の研究では分からなかった、国民読書運動の全体像を明らかにすることができた。そして、堀内庸村の経歴と彼の読書指導理念、そして彼が国民読書運動で果たした役割を見ていくことで、国民読書運動には、従来の研究で指摘されていた思想善導の役割だけではなく、これまであまり注目されてこなかった、国民の教養水準の向上という面があったということを実証することができた。これらは、本研究が堀内庸村と彼の著書を取り上げて分析した成果であると考えられる。

（指導教員 原 淳之）